

源光遺跡

—都市計画道路源光町田線関連遺跡調査報告書—

平成 31 年 3 月

宮城県教育委員会

源光遺跡

—都市計画道路源光町田線関連遺跡調査報告書—

序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から早 8 年が経過いたしました。復興への取組みは着実に進められておりますが、沿岸地域における生活基盤の整備をさらに促進させる必要があると認識しております。

震災以降、復興道路や常磐線復旧、高台移転事業等の復興事業に伴う発掘調査を実施してまいりました。当教育委員会では、平成 24 年度以降、全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得て調査体制を強化するなどして、復興調査に迅速に対応してまいりましたが、ようやく収束が見える段階を迎えつつあります。引き続き、関係機関と連携を図り、復興調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努力していきたいと考えております。

本書は、平成 30 年度に栗原市の都市計画道路源光町田線整備事業に先立って実施しました源光遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡などが発見され、当地域の古代集落の一端が明らかとなりました。

今回の調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長 高橋 仁

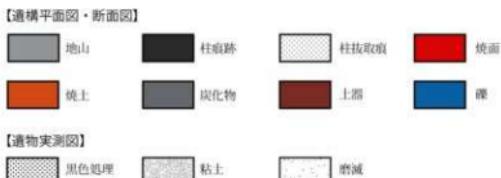
例　　言

1. 本書は、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所との協議に基づき、平成30年度に実施した都市計画道路源光町田線改良工事に伴う源光遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に際しては、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順、敬称略）。

安達訓仁（栗原市教育委員会）、高橋透・村田晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）
栗原市教育委員会
4. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「築館」「金成」を複製して使用したものである。
5. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位は座標化を表している。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SI: 竪穴建物跡 SK: 土坑 SX: 竪穴遺構 P: 柱穴、ピット K: 竪穴建物内の土坑
7. 遺構図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺跡周辺地形図：1/50,000 調査区位置図：1/5000、1/1000 遺構配置図：1/200
遺構毎の平面図・断面図：1/60、1/40
8. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、10世紀前葉に降下した十和田a火山灰と考えられている（白鳥1980、井上・山田1990）。
9. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帖 1996年版』（小山・竹原：1996）を用いている。
10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は全て1/3である。遺物写真図版についても同様の縮尺である。
11. 土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。
12. 土器の観察表で、法量の（ ）は推定値を示す。
13. 遺構図や遺物図で示した塗りは、以下の通りである。



14. 本書の遺構・遺物の整理は、西村力・佐久間光平・矢内雅之が担当し、千田敦子・中島敦子・與名本京子・大沼美代子・亀山昭子・佐藤せい子・只木一美・山田哲子が補助した。
15. 本書の執筆・編集は、調査担当者の協議の後に矢内雅之が行った。編集にあたっては西村力・佐久間光平がこれを補助した。
16. 本遺跡の調査成果については、現場公開時や平成 30 年度宮城県遺跡調査成果発表会、第 45 回古代城柵官衙遺跡検討会でその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合には、本書がこれらに優先する。
17. 発掘調査の記録類や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺 跡 名：源光遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No. 41068） 遺跡略号：AGK

所 在 地：宮城県栗原市築館伊豆、築館源光、築館内沢

調査原因：都市計画道路源光町田線改良工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

調査期間：平成 29 年 10 月 11 日（確認調査）

平成 30 年 6 月 4 日～7 月 13 日（本発掘調査）

調査面積： 51m²（確認調査）

310m²（本発掘調査）

調査協力：宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所 栗原市教育委員会

調 査 員：西村 力 佐久間光平 矢内雅之

目 次

序 文

例 言

調査要項

目 次

第 1 章 調査に至る経緯.....	1
第 2 章 遺跡の概要.....	1
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	2
第 3 章 調査成果.....	4
1. 調査の方法と経過.....	4
2. 基本層序.....	6
3. 発見された遺構と遺物.....	7
(1) 古代.....	7
(2) その他.....	14
第 4 章 総 括	17
1. 古代について.....	17
(1) SHI 積穴建物跡.....	17
①出土遺物と年代.....	17
②遺構の特徴.....	18
(2) 集落の様相.....	18
2. その他の時代について.....	18
(1) 繩文時代.....	18
(2) 中世.....	19
3. まとめ.....	20

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 源光遺跡の位置.....	1	第10図 SI1B 竪穴建物跡の柱穴とピット.....	12
第2図 源光遺跡と周辺の遺跡.....	2	第11図 SI1B 竪穴建物跡炭化材・焼土・遺物出土状況.....	12
第3図 源光遺跡と調査地点.....	4	第12図 SI1B 竪穴建物跡出土遺物(1).....	13
第4図 調査対象範囲と調査区.....	5	第13図 SI1B 竪穴建物跡出土遺物(2).....	14
第5図 基本層序柱状図.....	6	第14図 SX2 竪穴遺構.....	15
第6図 遺構配置図.....	7	第15図 SK3 土坑・P4 ピット.....	16
第7図 SI1A 竪穴建物跡.....	8	第16図 その他の出土遺物.....	16
第8図 SI1A 竪穴建物跡出土遺物.....	9	第17図 源光遺跡調査地点と遺構分布.....	19
第9図 SI1B 竪穴建物跡.....	11		

写真図版目次

写真図版 1 調査区.....	22	写真図版 5 SX2 竪穴遺構、SK3 土坑、P4 ピット.....	26
写真図版 2 SI1B 竪穴建物跡、SX2 竪穴遺構.....	23	写真図版 6 SI1A・B 竪穴建物跡出土遺物.....	27
写真図版 3 SI1A・B 竪穴建物跡.....	24	写真図版 7 SI1B 竪穴建物跡・遺構外出土遺物.....	28
写真図版 4 SI1B 竪穴建物跡.....	25		

第1章 調査に至る経緯

現在、栗原市築館の市街地東部においては一般国道4号築館バイパス建設が行われており、これに伴って築館バイパスに取り付く都市計画道路一迫南線（市道）やこれと交差する都市計画道路源光町田線（県道）の整備事業も進められている。これらの都市計画道路は、源光遺跡（第1・2図）や下萩沢遺跡などが所在する丘陵上に計画されたため、両遺跡との係わりが生じたことから、栗原市教育委員会や宮城県教育委員会では、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所や栗原市都市計画課等の関係機関と協議を行い、平成22年度以降、事前に確認調査や本発掘調査を実施してきた（第3図）。これまでの両線の改良工事等に伴う発掘調査では、古代の竪穴建物跡や中世以降と推定される竪穴遺構・掘立柱建物跡などの遺構が確認されている（栗原市教育委員会2012・2015）。

今回、発掘調査の対象となった地点は、都市計画道路一迫南線と接続する源光町田線の交差点部分の、拡幅工事が計画されている範囲である（第4図）。事業主体者である県北部土木事務所栗原地域事務所など関係機関との協議を踏まえ、平成29年度に当該地の確認調査（T1～11）を実施したところ、交差点南側のT2トレンチで古代の竪穴建物跡等を検出した。この確認調査の結果を受けて、翌年の平成30年6月から交差点の隅切り部分を対象とした本発掘調査（今回の調査区）を実施することになった。



第1図 源光遺跡の位置

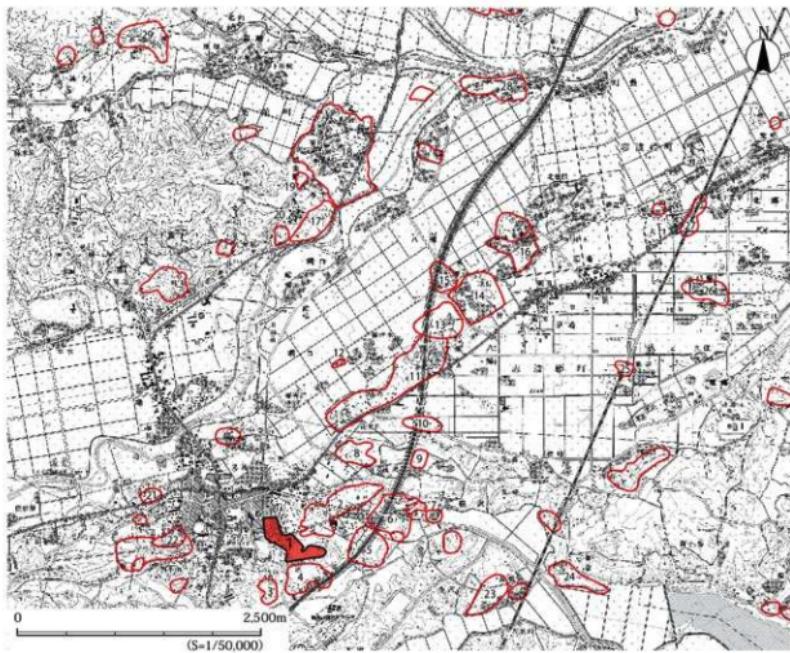
第2章 遺跡の概要

1. 地理的環境

源光遺跡は、宮城県北部に位置する栗原市築館の市街地から東側へ1kmほど離れた源光地区に所在する（第2図）。遺跡周辺には、奥羽山脈から東方へ延びる陸前丘陵の一部（築館丘陵）と、それにつながる沖積地（迫川低地）が広がっている。築館丘陵は奥羽山脈の東麓に源を発する迫川水系の河川によって複雑に開析され、樹枝状を呈している。丘陵と迫川低地との比高は10～20mである。遺跡は、築館丘陵から派生するなだらかな丘陵上にあり、沢に挟まれた標高35～36mほどの平坦部に立地する。この丘陵の北側には、旧北上川支流の一迫川が東流する。築館市街地に近い遺跡の西側は宅地化が進んでいるが、東側には田畠、山林などが広がっている。

2. 歴史的環境

源光遺跡は一般国道4号築館バイパス建設に際して発見された遺跡であり、縄文・古代から近世にかけての集落跡として登録されている（第2図）。近年では栗原市教育委員会により発掘調査が行われており、平成23年度に実施された都市計画道路の建設に伴う発掘調査では、8世紀末葉から9世紀前半頃に位置づけられる竪穴建物跡が2軒検出されている（栗原市教育委員会2012）。また、



#	遺跡名	立地	種別	時代	#	遺跡名	立地	種別	時代
1	源光遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・中世・近世	16	安瀬遺跡	丘陵	集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世
2	下戸沢遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	17	史跡人の川遺跡	丘陵	集落・櫛穴墓	縄文・弥生・古墳前後・奈良・平安・中世
3	高山1遺跡	丘陵	散在地	縄文・古代	18	史跡伊豆城跡	段丘	城壁・集落	旧石器・古墳前・後・奈良・平安
4	高山2遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安	19	其内駿河道跡	段丘	散在地	縄文・古代
5	告内駿河道跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	20	大久古墳群	丘陵	墓	古墳期・奈良
6	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安	21	舟野遺跡	段丘	散在地	古代
7	舞沢遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・中世	22	幕張山比道跡	丘陵	散在地	古墳期
8	大天馬遺跡	段丘	集落	奈良・平安	23	照鏡台遺跡	丘陵斜面	散在地	縄文・古墳・古代
9	後沢遺跡	段丘	集落	奈良・平安	24	沼倉貝塚	丘陵	集落・貝塚	縄文・弥生・奈良・平安
10	山ノ上遺跡	段丘	集落	縄文・奈良	25	熊谷遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安
11	御野笠遺跡	段丘	集落	旧石器・縄文・弥生・古墳前後・奈良・平安・近世	26	筑摩遺跡	段丘	墓	奈良
12	空の穴遺跡	段丘	集落	古代	27	人門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世
13	宇南遺跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	28	利郷御遺跡	自然堤防	散在地	縄文・古代
14	吹付遺跡	段丘	集落	奈良・平安	29	長者原遺跡	丘陵	集落	古墳中・奈良・平安
15	網ノ矢遺跡	段丘	集落・城館	縄文・弥生・古墳前・古代・中世・近世	30	貝良A遺跡	丘陵	集落	奈良・平安

第2図 源光遺跡と周辺の遺跡

平成 26 年度に実施された宅地造成に伴う発掘調査（第 3 図）では、8 世紀前半頃の関東系土師器を伴う掘立柱建物跡 3 棟と竪穴建物跡 1 軒が検出されたほか、工事立会い地点では竪穴建物跡とみられる落ち込み、掘立柱建物跡、溝跡が確認されている（栗原市教育委員会 2015）。

本遺跡の周辺一帯にも同様の時期の古代遺跡が多数分布する（第 2 図）。それらの遺跡には、神護景雲元年（767）に造営された城柵官衙遺跡である史跡伊治城跡（18）との関連性を窺わせるものが多い。この伊治城跡は源光遺跡から北方約 4 km の丘陵上に所在する。これまでの調査により、同遺跡は正殿・前殿・北殿・脇殿などが規則的に配置された政庁と、それを取り囲む内郭、外郭からなる三重構造城柵であること、政庁はⅠ期（767 以降）、Ⅱ期（780 以前）、Ⅲ期（780 以降）の変遷を経て、9 世紀初頭頃まで存続したことなどが明らかとなっている（築館町教育委員会 1993、村田 2004 他）。なお、古代栗原郡の建郡は伊治城造営の同年である神護景雲元年（767）もしくは 769 年と考えられている。

源光遺跡と沢を挟んだ南側の丘陵上には原田遺跡（4）、北側の丘陵上には下萩沢遺跡（2）、佐内屋敷遺跡（5）、木戸遺跡（6）が所在し、さらにその北側には大天馬遺跡（8）、後沢遺跡（9）、山ノ上遺跡（10）や御駒堂遺跡（11）が所在する。下萩沢・大天馬・後沢・山ノ上・御駒堂遺跡では関東系土師器が出土しており（栗原市教育委員会 2016、宮城県教育委員会 1980b・1982・2016ab）、特に後二者は土器・カマドとともに関東型が主体をなす。のことから、両遺跡は 7 世紀末から 8 世紀前半にかけて、関東からの移民によって形成された集落と考えられている。栗原地域は当該期の移民の居住地としては最北に位置するが、この時点では城柵の設置には至らず、その成立は上記の伊治城の造営まで時期が降る。

原田・下萩沢遺跡は計画的な建物配置や円面鏡・鉄製の武器類の出土などから、律令政府の辺境政策のもとにつくられた集落と考えられており、栗原郡設置との関わりが指摘されている。両遺跡では焼失した竪穴住居（建物）跡が多数検出され、このうち時期を特定し得るものは、すべて 8 世紀後半に位置づけられている。これらの住居（建物）跡は、「続日本紀」の宝亀 11 年（780）の記事にみえる伊治公皆麻呂の乱に際して焼失したものと考えられており（宮城県教育委員会 2009）、原田・下萩沢遺跡や先述の御駒堂遺跡は、8 世紀前葉以降、律令国家側とのつながりが強い人々が居住するエリアとして蝦夷側から意識されていた可能性も指摘されている（宮城県教育委員会 2016）。

このように、奈良・平安時代の当地域では、在地の一般集落に加えて官衙関連集落や移民に伴う集落など、多様な性格を持つ集落が展開していた点が特徴といえる。源光遺跡の集落の形成にも、こうした当地域の歴史的な背景があるとみられている。

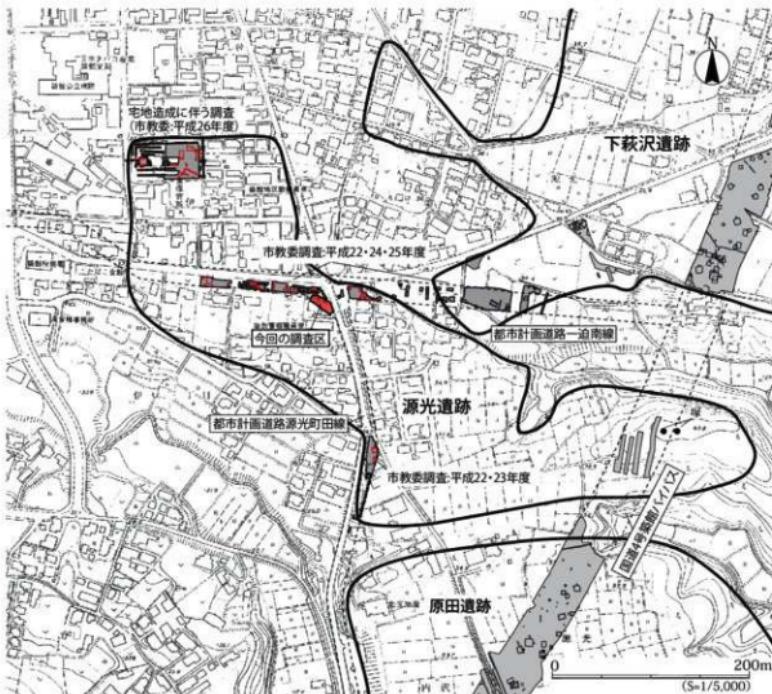
第3章 調査成果

1. 調査の方法と経過

今回の調査は平成29年の確認調査で遺構が確認された拡幅工事部分を対象とするもので、調査面積は310m²である（第3・4図）。

発掘調査は平成30年6月4日から開始した。排土置き場が狭いことから、調査区内を北西半と南東半に分け、この順に掘削・精査を行った。その結果、竪穴建物跡1軒、竪穴遺構1基、土坑1基、ピット1個、柱列1条、溝跡3条を検出した。これらのうち、調査区北西半で検出した柱列および溝跡については近代以降の遺物が出土したことから、いずれも近現代の攢乱であることが判明した。

調査区や遺構の平面図作成にあたっては、電子平板を使用し、測量に際し遺跡の南東にある工事用基準杭4-1、4-2をもとに基準点BM1、BM2を設定した（第4図）。基準点の座標（世界測地系第X系）は次の通りである。



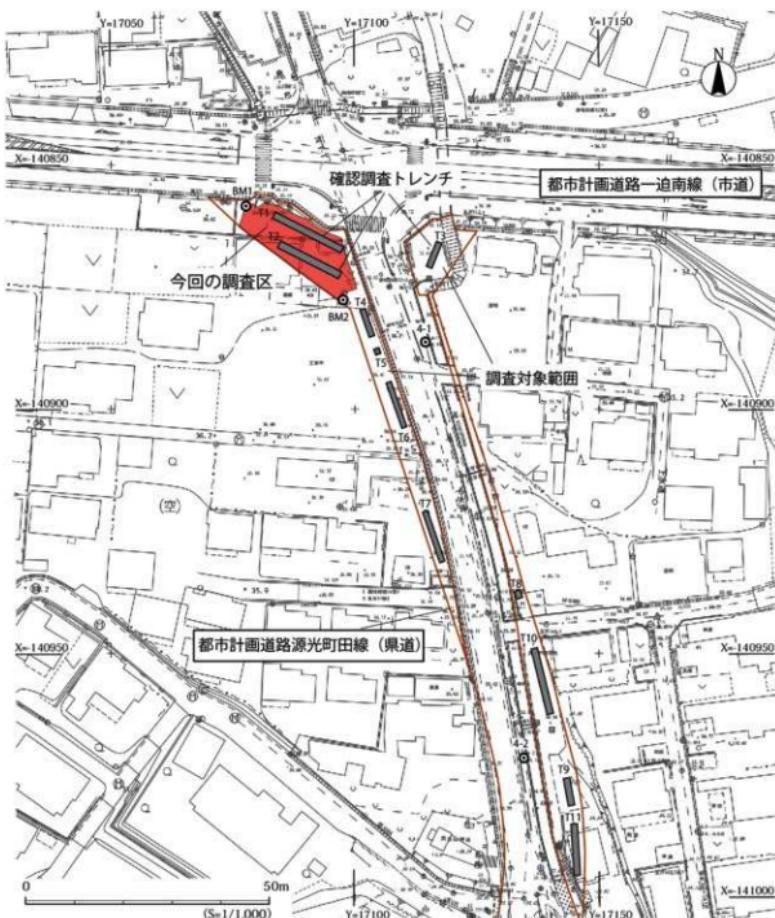
（栗原市教育委員会 2016）第2図をもとに作成

第3図 源光遺跡と調査地点

杭 4-1 X = -140886.272 Y = 17114.400 BM1 X = -140858.350 Y = 17077.588

杭 4-2 X = -140971.373 Y = 17134.583 BM2 X = -140877.577 Y = 17097.503

また、適宜 1/20 の縮尺で断面図を作成した。写真撮影には 2,620 万画素のデジタルカメラを使用した。精査および記録については 7 月 11 日に終了した。調査区は 6 月 12 日に北西半、7 月 12 日に南東半を埋め戻し、7 月 13 日には機材を撤収して調査を終了した。なお、6 月 25・26 日には現場公開を行い（写真 2）、計 36 名が参加した。



第 4 図 調査対象範囲と調査区



写真1 調査状況

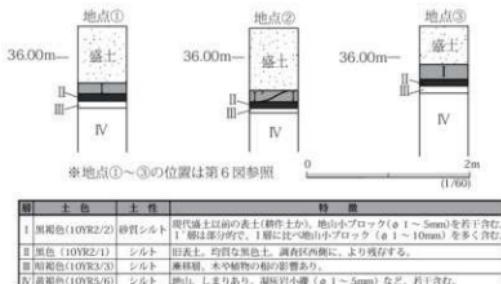


写真2 現場公開 (6/25)

2. 基本層序

調査区内は、宅地造成に伴い厚さ 50 ~ 70cm 程の盛土整地が施されていた。盛土整地下の層序は、調査区全体でほぼ同じ様相を呈し、以下の特徴をもつ I ~ IV 層が確認された（第 5 図）。

これらの基本層序は、栗原市教育委員会による平成 23 年の源光遺跡発掘調査時（栗原市教育委員会 2012）のものとほぼ同様である。なお、遺構は IV 層の地山面で検出したが、現代の耕作痕・根などの搅乱が広範囲にわたり、地山面以下まで及んでいた。



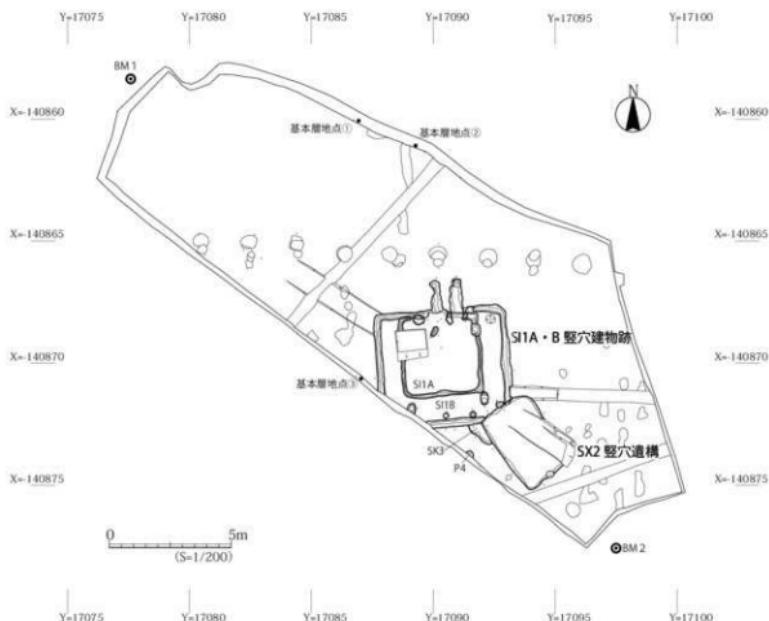
第5図 基本層序柱状図



写真3 調査区北壁土層断面

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査では、古代の竪穴建物跡1軒、その他の時代の竪穴遺構1基、土坑1基、ピット1個を検出した（第6図）。遺物には縄文土器、土師器環・甕・ミニチュア土器、須恵器環があり、総量はコンテナ約3箱分である。



第6図 遺構配置図

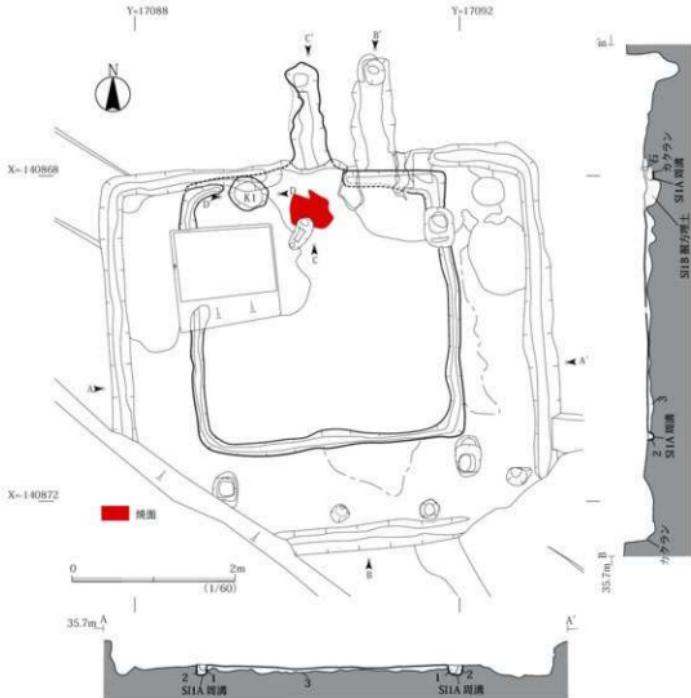
(1) 古代

【SI1 竪穴建物跡】(第6図)

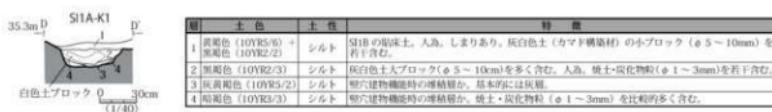
調査区中央から南東寄りの、第IV層で検出した。この竪穴建物跡は一度建て替えられており(SI1A → SI1B)、その際に東・西・南辺を100～120cm拡張している。北辺は20cm程度拡張し、さらにカマド(煙道)を東へ80cmほどの位置に造り替えている。また、堆積土や床面から屋根材とみられる炭化材や焼土ブロックが多数出土したことから、この竪穴建物は最終的に焼失したものと捉えられる。

【SI1A 竪穴建物跡】(第7・8図)

〔規模・平面形〕東西・南北ともに約3.3mの隅丸方形である。



土色	土性	特徴
1 黄褐色 (10YR4/4) 粘質シルト	S1A 地溝埋土	地山土岩が土体。しまりあり。
2 黄褐色+黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト	地山(6)を多量に含む。地溝土を含む。	
3 黄褐色 (10YR4/2) シルト	S1A 地方埋土	しまりあり。地山ブロックを多量に含む。



第7図 S1A 穴式建物跡

〔方向〕東辺で測ると北で西へ約4度偏する。

〔床面〕掘方埋土上面を床面としている。カマド燃焼部底面の焼面が残存している。

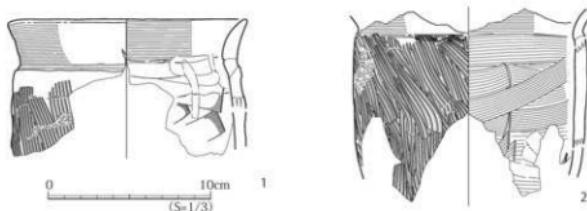
〔主柱穴〕主柱穴は確認していない。

〔カマド〕北壁中央部に付設されていたとみられるが、カマド本体は建物の建て替え時に解体されており、煙道部と燃焼部焼面のみを検出した。煙道部は長さが約1.3m、幅が約0.42mである。煙道部の堆積土は9層確認された（第7図）。8層がカマド構築時に堆積した残土、7層がカマド機能時の自然堆積土と考えられる。1・2・4・5・6層がカマド廃絶後の自然堆積土で、4層はカマド構築材の白色土ブロックを含む。3層はカマド天井崩落土である。なお、後述するK1の埋土にこのカマドの構築材とみられる灰白色土ブロックが含まれている。

〔周溝〕周溝はカマドを除き、全周する。上幅が9～27cm、下幅が3～18cm、深さが6～12cmで、断面形はU字形を呈する。

〔その他の施設〕北壁際西よりの位置で、K1を検出した（第7図）。K1は建物の建て替え際に埋められており、上面はSI1B貼床で覆われていた。埋土には壊したカマドの構築材や焼土が不均質に混じる。

〔出土遺物〕K1堆積土中から土師器甕、煙道内堆積土から土師器甕（第8図1）、周溝埋土から土師器甕（第8図2）が出土している。なお、掘方埋土から縄文土器の小片が出土している。



No.	種別	基標	層位	厚さ	口径	直径	周長	形状	特徴	回数	目録
1	土師甕	甕	煙道内4層・7層上面 (P01)	1/8	14.5	—	—	外側：[□]ヨコナデ〔脚〕ハケメ 内側：[□]ヨコナデ〔脚〕ヘラナデ。 頂部有段。	61	1	
2	土師甕	甕	掘方埋土	1/10	—	—	—	外側：[■]ナデに近いハケメ 内側：ヨコナデ→ヘラナデ→ボナデ。頂部有段。	62	2	

第8図 SI1A 穫穴建物跡出土遺物

【SI1B 穫穴建物跡】（第9～13図）

〔規模・平面形〕東西約5.5m、南北約4.8mの隅丸方形である。

〔重複関係〕南東隅でSK3土坑・SX2竪穴遺構と重複する。SK3より新しく、SX2より古い。

〔方向〕東辺で測ると北で西へ約4度偏する。

〔壁〕地山を壁とし、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残りのよい東辺で、床面から26cmである。

〔床面〕全体的にほぼ平坦である。SI1A床面をそのまま利用するとともに拡張部も掘方埋土とし、北

東・北西隅では部分的に貼床を施している。

〔主柱穴〕 主柱穴を3個検出した(SI1B-P1～P3)。建物北西隅の攢乱により柱穴が壊されているが、SI1B-P1～P3の位置から、主柱は本来4本であったと推定される。いずれも柱痕跡が認められる。

掘方の平面形は長辺45～50cm、短辺30～36cmの隅丸方形を呈する。深さは50～68cmである。柱痕跡は長径20～25cm、短径14～21cmの楕円形を呈し、深さは47～60cmである(第10図)。

〔カマド〕 北壁中央部からやや東よりに付設されていた。本体が建物内に設置され、その奥に長さ1.36m、幅0.5m程の煙道が延びる。カマド構築土は下部が地山小ブロックを含んだ褐色シルトで、上部が白色土である。両ソーデ端部に土師器甕(第12図5)を逆位で埋め込み補強しているが、その残存状況から、人為的に破壊を受けたものとみられる(写真図版4-2)。燃焼部底面は激しく被熱し硬化しており、その奥に埋め込まれた礫が支脚であったと考えられる。カマド部分の堆積土としては、12層がカマド燃焼部の灰・焼土の堆積、9層がカマド崩落土、8・10・11層が煙道部の堆積土である。8層はカマド崩落土由来のブロックを多く含み、10・11層はそれぞれ地山ブロック・地山粒を多く含む。カマド内やその周辺の床面からは土師器甕・坏や焼けた礫などが出土した。土師器甕(第12図6)はカマド内で破損し、底部外面が上を向いた状態で出土した(写真図版4-2・3)。なお、12層の一部をサンプルとして採取し、2mmのフライで水洗したが、焼骨等は含まれていなかった。

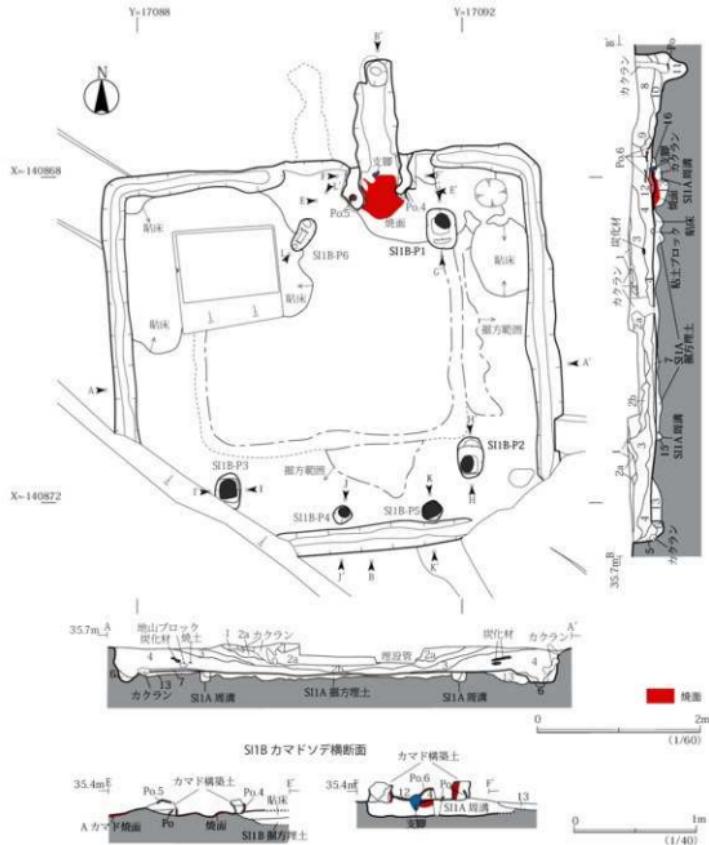
〔周溝〕 周溝はカマドを除き、確認された範囲では全周する。上幅が22～35cm、下幅が7～16cm、深さが10～16cmで、断面形はU字形を呈する。

〔その他の施設〕 カマド対面の南辺で柱穴を2個(SI1B-P4・5)検出した(第9・10図)。これらは入り口施設に関わる柱穴と考えられる。掘方は径25cm程の円形で、深さは26～30cmである。柱痕跡はP4が径13cm程の円形、P5が長径24cm、短径19cm程の楕円形である。

この他、SI1A カマド燃焼部焼面を切るかたちで、SI1B-P6を検出した(第10図)。性格は不明であるが、SI1Bに伴うものと考えられる。堆積土は、カマド構築材に似たにぶい黄褐色土を含む。

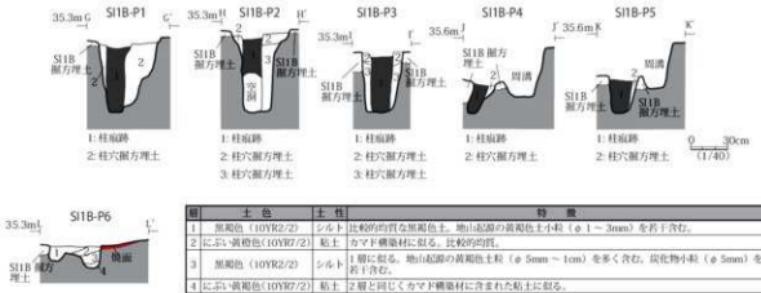
〔堆積土〕 カマド部分を除く堆積土は大別6層に分けられた。1層が均質な黒色シルト、2層が灰白色火山灰(うち2a層は純堆積)、3層が灰白色火山灰・炭化物・地山小ブロックを少量含んだ黒褐色シルトである。灰白色火山灰の堆積状況から、その降下時には竪穴建物内中央が窪んだ状態であったことがわかる。4層は炭化物・炭化材片や焼土ブロックを多く含んでおり、火災後に堆積した層と判断される(第9図)。炭化材は主柱を結ぶ線に対して放射状に分布するものが垂木、それに直交するものが棟木と考えられる(第11図)。焼土ブロックは屋根葺土と考えられる。この層からは土器が比較的多く出土している。

〔出土遺物〕 床面から土師器甕(第12図1)・甕(第12図2・3)が出土した。カマド焚口両ソーデ端部から補強材として土師器甕(第12図4・5)が出土した。カマド内燃焼部底面付近から土師器甕(第12図6)、カマド内堆積土から土師器甕(第13図7)、煙道内堆積土から土師器甕(第13図8)が出土した。竪穴建物内堆積土からは土師器甕(第13図9～12)・ミニチュア土器(第13図13)・坏小片・須恵器坏(第13図14)が出土した。周溝埋土からは土師器甕口縁部破片が出土しており、第13図9と同一個体と考えられる。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

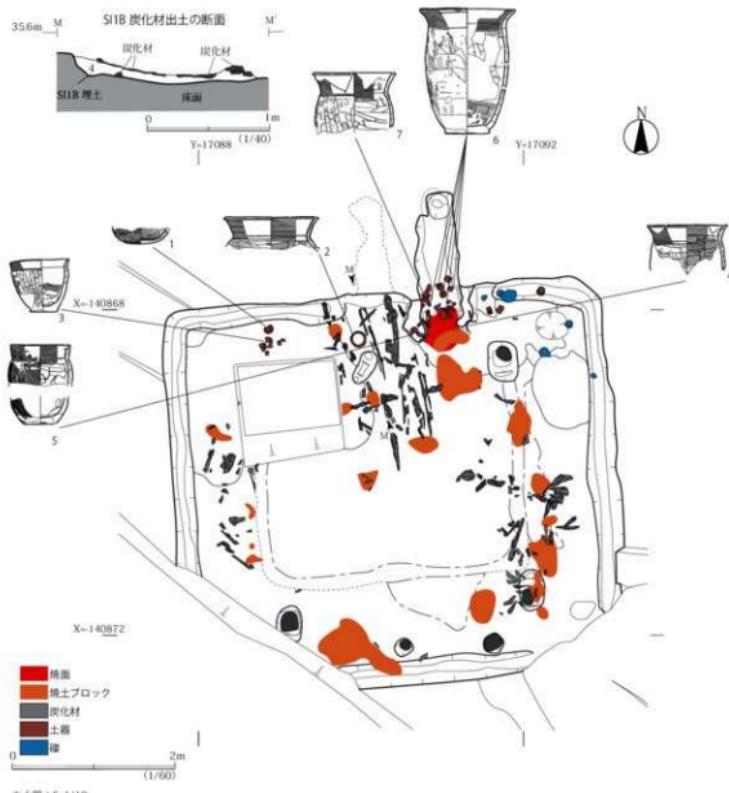


番	土色	土性	特徴
1	黒色（10YR2/1）	シルト	旧表上の黒色土起掘。均質。中空砕石に堆積。
2a	灰褐色土（10YR6/2）	シルト	旧白山丸山、中空砕石に堆積。
2b	灰褐色土（10YR4/2）	シルト	SIIIB 塵内堆積
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	旧白山丸山がブロック状に混じる。
4	暗褐色（10YR3/3）	シルト	旧白山丸山から少しある。
5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	上部に炭化材、土塊が多い。地山小ブロックを多く含む。
6	灰褐色土（10YR4/3）	シルト	畠原土。地山小ブロックを多く含む。しまりあり。
7	灰褐色土（10YR4/3）	シルト	SIIIB 混潤内堆積
7	灰褐色土（10YR4/3）	シルト	床面土上
8	黒褐色（10YR3/2）	シルト	床面土上に多く分布。地山小ブロックを多く含む。炭化物類を少含む。
9	灰褐色土（2.5Y7/2）	砂質シルト	9と同様カマド下落土起源のブロックを多く含む。
10	暗褐色（10YR3/3）	シルト	SIIIB 塘内堆積
11	灰褐色土（10YR4/3）	シルト	カマド下落土起源のブロックを多く含む。
12	褐色暗褐色土（7.5YR4/2）	シルト	地山小ブロックを多く含む。
13	暗褐色土（10YR3/3）	シルト	SIIIB カマド燃焼部
13	暗褐色土（10YR3/3）	シルト	SIIIB 地盤理土
			地山小ブロック（φ 40mm 以下）を非常に多く含む。しまりあり。

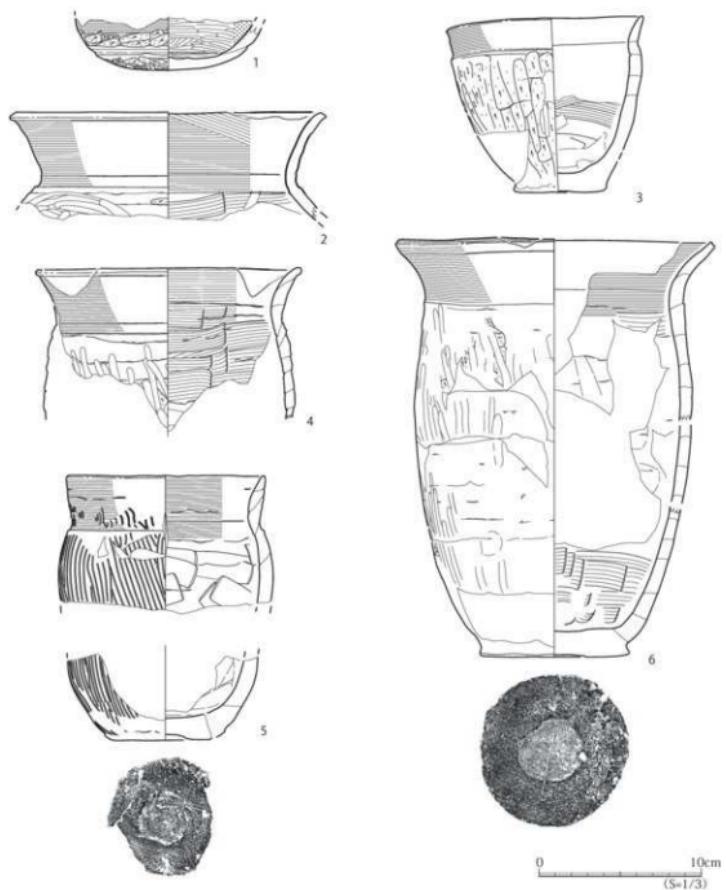
第9図 SI1B 穴建物跡



第10図 SI1B 穫穴建物跡の柱穴とピット

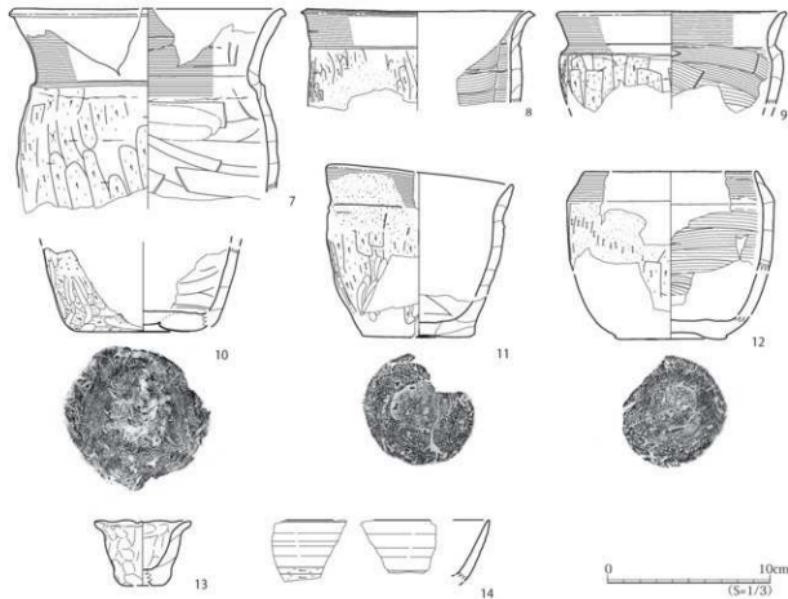


第11図 SI1B 穫穴建物跡炭化材・焼土・遺物出土状況



No.	種別	断面	部位	残存	口径	底径	高さ	特徴	参考	目録
1	土師器	片	床面	2/3	—	—	—	外面:[口]ヨコナデ→ハラケズリ「体一底」ハラケズリ 内面:ヘラミガキ→黒色處理。全体外面に段、内面に斜、段を有する。	6.4	3
2	土師器	片	床面	1/5	18.6	—	—	外面:[口]ヨコナデ[脚]ハラケズリ→ヘラミガキ 内面:[口]ヨコナデ[脚]ヘラナデ。脚部有段。	6.5	7
3	土師器	片	床面	5/8	11.9	5.6	10.8	外面:[口]ヨコナデ[脚]ハラケズリ→動いミガキ 内面:[口]ヨコナデ[脚]ヘラナデ。脚部有段。底部中央に浅い凹み。	6.6	4
4	土師器	片	カマドソデ焼成土 (Po.4)	1/8	16.0	—	—	外面:[口]ヨコナデ[脚]ハラケズリ→ヘラミガキ 内面:[口]ヨコナデ[脚]ヘラナデ。脚部有段。脚上部外輪輪郭不明瞭。	6.8	8
5	土師器	片	カマドソデ焼成土 (Po.5)	1/6	(12.0)	7.0	—	外面:[口]ヨコナデ→ハラケズリ→ヘラミガキ 内面:[口]ヨコナデ[脚]ヘラナデ。底部有段。底部中央に凹み。	6.7	15
6	土師器	片	カマド燃焼底面 (Po.6)	2/3	19.1	9.1	25.6	外面:[口]ヨコナデ[脚]ハラケズリ→ヘラミガキ 内面:[口]ヨコナデ[脚]ヘラナデ。脚部に斜い段有り。脚上部外輪輪郭不明瞭。底部中央に凹み。	7.1	10

第12図 SI1B 穫穴建物跡出土遺物（1）



番号	種別	器種	層位	残存	口径	底径	断面	特徴	寸法	目録
7	土師器	壺	カマド内 10 層	1/10	16.4	—	—	外面: [□] ヨコナデ [腹] ヘラケズリ 内面: [□] ヨコナデ [腹] ヘラナデ [底]、底部有凹。	7.2	11
8	土師器	壺	縦道内 11 層	2/9	13.6	—	—	外面: [□] ヨコナデ [腹] ナデに近いヘラケズリ 内面: [□] ヨコナデ [腹] ヘラナデ、内外面炭化物付着。口背断面四角、底部有凹。	7.3	6
9	土師器	壺	4 級	1/9 (13.0)	—	—	—	外面: [□] ヨコナデ [腹] ヘラケズリ 内面: [□] ヨコナデ [体] ヘラナデ、細部有凹。	7.7	14
10	土師器	壺	4 級	1/10	—	8.2	—	外面: [腹] ヘラケズリ→ラミガキ [底] ミガキ 内面: [腹~底] ヘラナデ、底部と側面部の複合成形ケズリ状の施釉跡有り。底部中央部に凹み。	7.6	16
11	土師器	壺	4 級	1/2 (11.4)	6.9	10.6	—	外面: [□] ヨコナデ [腹] ヘラケズリ→ラミガキ 内面: [□] ヨコナデ [体]	7.5	18
12	土師器	壺	4・7 級	2/3 (10.5)	6.8	—	—	ヘラナデ。二次焼成。他、破片 2 点 (1・3・4 級、光沢陶なし)	7.4	19
13	土師器	ミニチュア	4 級	1/2 (5.8) (2.4)	—	—	—	外面: [□] ヨコナデ [体] ヘラケズリ 内面: [□] ヨコナデ [体] ヘラナデ、外面焼けたジケズリ有り。	7.8	21
14	土師器	杯	4 級	—	—	—	—	外面: ロクロナデ、体部下端横幅ヘラケズリ 内面: ロクロナデ。	6.3	17

第 13 図 SI1B 穫穴建物跡出土遺物 (2)

(2) その他

【SX2 穫穴遺構】(第 14 図)

〔位置〕 調査区南東側の第IV層で検出した。

〔規模・平面形〕 規模は東西方向が約 3.5 m、南北方向が 2.1 m で、平面形は長方形状である。

〔重複関係〕 SI1A・B 穫穴建物跡・SK3 土坑と重複し、これらよりも新しい。

〔方向〕 西辺で測ると北で西へ約 35 度偏する。

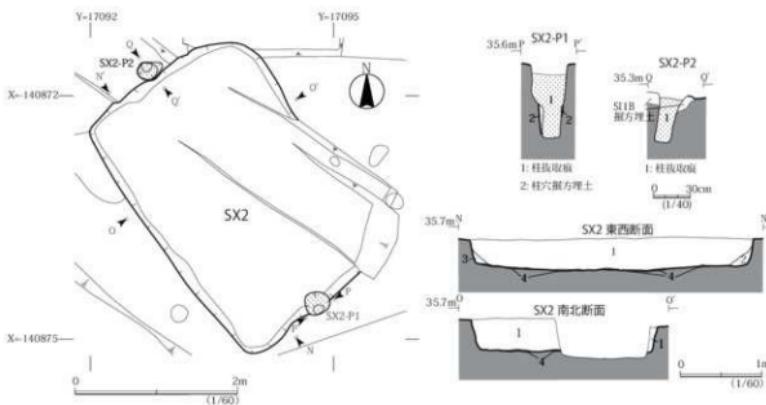
〔床面〕 ほぼ平坦で、地山を床面としている。

〔柱穴〕 短辺中央部の壁際にそれぞれ柱穴が伴う（SX2-P1・P2）。柱穴はいずれも円形状で、P1は径約30cm、深さ約60cm、P2は径約20cm、深さ約40cm（検出面から）である。柱はいずれも抜き取られたものとみられる。

〔堆積土〕 埋土は4層認められるが、埋土の特徴から埋め戻されたと考えられる。底面（床面）直上には機能時の堆積層とみられる黒褐色シルト層が薄く堆積しており、部分的に硬化面も認められた。

〔壁〕 壁はやや開き気味に立ち上がる。検出面から底面までの深さは約40cmである。

〔遺物〕 出土していない。



番号	土色	土性	特徴
1	灰褐色 (10YR2/3)	シルト 人為か、地山の ($\phi 1\sim 5mm$) を多量に含む。炭化物 ($\phi 1\sim 5mm$) を若干含む。	
2	褐褐色 (10YR2/2)	シルト 内部埋物に埋積。比較的均質な黒色土。	
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト 東側壁間に埋積。壁崩落土か。黒褐色土が不均質に混じる。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト 床面直上に薄く堆積 (厚さ1cm程度)。しまりあり。	

第14図 SX2 穫穴遺構

【SK3土坑】(第15図)

〔位置〕 調査区南東側の第IV層で検出した。

〔重複関係〕 SI1A・B 穫穴建物跡、SX2 穫穴遺構と重複し、これらよりも古い。

〔規模・形態〕 一部しか残存していないため、形状や規模は不明である。深さは12～14cm程度で、底面は凹凸がある。断面形は浅い皿状を呈するとみられる。ただし、底面の凹凸がやや顕著であることから、自然の落ち込みの可能性もある。

〔堆積土〕 堆積土は旧表土（II層：黒色土）を起源とする自然堆積の黒褐色シルトのみである。

〔遺物〕 出土していない。

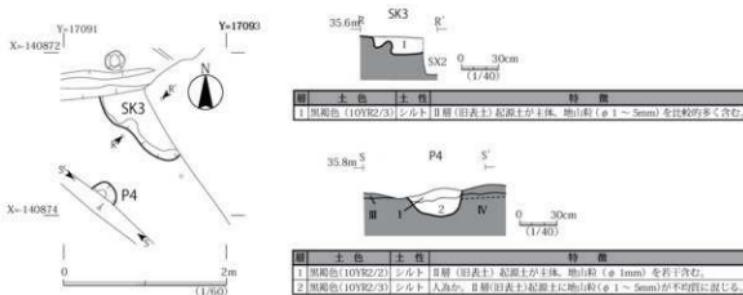
【P4 ピット】(第 15 図)

〔位置〕調査区東側の南壁で半分のみ検出した。

〔規模・形態〕平面形は円形状で、径は約 45cm、深さは約 20cm である。断面形は皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 2 層に分けられるが、下部は旧表土（II 層）に類似した黒褐色シルトに地山粒が不均質に混じることから、人為的埋土の可能性がある。

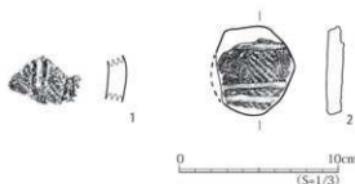
〔遺物〕出土していない。



第 15 図 SK3 土坑・P4 ピット

【遺構外の遺物】(第 16 図)

調査区南東部付近の黒褐色土（II 層）などから、縄文土器の破片が少量出土している。第 16 図 1 は SK3 土坑付近で出土した深鉢の小片で、2 条 1 組の粘土紐貼り付けが認められる。同図 2 は SI1 積穴建物跡堆積土から出土した円盤で、3 条の平行沈線文を有する。施文は両者とも LR 縄文の縦回転による。両者とも縄文時代中期の大木 8a 式と考えられる。



名	種類	品種	層位	特徴	回数	寸法
1	縄文土器	1495	II 層(SX2 施文)	外底: 2 条 1 組の粘土紐貼り付け。LR 縄文横回転。大木 8a か。	7-9	22
2	縄文土器	SHIBA4 種	II 層	縫 5.6cm、横 4.9cm、厚 1.0cm 外面: 平行沈線文。LR 縄文横回転。大木 8a か。	7-10	23

第 16 図 縄文時代の出土遺物

第4章 総括

1. 古代について

今回の都市計画道路（県道）源光町田線改良工事に伴う発掘調査では、古代の竪穴建物跡1軒、その他の時代の竪穴遺構1基、土坑1基、ピット1個等を検出した。遺物は、古代の土師器類が主体で、ほかに須恵器と縄文土器の破片が若干数出土している。以下、古代の竪穴建物跡の出土遺物や年代、構造的な特徴、その他の時代の遺構・遺物などについて検討を加える。

（1）SI1 竪穴建物跡

①出土遺物と年代

SI1B（建替え後）では、遺物が床面・カマド・周溝埋土の他、堆積土中から出土している。

土師器には壺・甕・ミニチュア土器があり、いずれも非クロコ調整である。

壺（第12図1）は底部が扁平な丸底を呈する。体部外面下位に段を有し、口縁部は内湾する。体部内面にも軽い段を有する。内面は不規則なヘラミガキ後、黒色処理されている。

甕は胴部形態によって長胴形、球胴形、鉢形に分けられる。長胴形の甕（第12図6）は口径19.1cm、器高25.6cmの大型品で、胴部の張りは弱く円筒形を呈しており、最大径は口縁部にある。頸部に軽い段を有し、頸部から外反して立ち上がり、口縁部付近で弱く内湾する。口縁部は端部を引き出して平坦に仕上げられており、断面は隅丸方形を呈する。球胴形の甕（第12図2）は口径18.6cmの大型品で、口縁部から肩部にかけて残存する。肩部が強く張ることから球胴形と判断した。頸部に段を有し、口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がっている。カマド左脇の床面で口縁部を上にした状態で出土しており、器台として転用されたものと考えられる。鉢形の甕（第12図3・5、第13図11・12）は口径10.5～12cmの小形品である。短い胴部を有し、底部から頸部にかけて内湾気味に外傾して立ち上がっており、頸部に段を有し口縁部にかけて外傾するもの（3・5・11）と、頸部でくの字に屈曲し口縁部にかけて内傾するもの（12）がある。器面調整は、基本的に口縁部はヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデであるが、外面ハケメ調整のもの（5）、ヘラケズリ後の最終調整にヘラミガキが施されるもの（3・11）もみられる。

ミニチュア土器（第13図13）は口径5.8cm、器高5.0cmである。器面調整は、内外面オサエである。

須恵器は壺の口縁～体部の小破片が1点のみ出土している（第13図14）。底部周縁・体部下端に回転ヘラケズリによる再調整が施されている。

SI1A（建替え前）では、煙道内堆積土や周溝埋土から土師器甕が若干出土したのみである（第8図1・2）。その特徴はSI1B出土の土師器甕と同様である。

こうした特徴をもった土器群の類例として、加美町壇の越遺跡第1群土器（宮崎町教育委員会1999）や栗原市御駒堂遺跡SI20住居跡出土土器（宮城県教育委員会1982）などを挙げることができる。これらの土師器はいずれも非クロコ調整であり、壺は底部が扁平な丸底で体部下位に段を有し、内面黒色処理されている。甕は長胴形・球胴形・鉢形があり、頸部に段を有するものが主体をなしている。壺については栗原市観音沢遺跡第12号住居跡出土土器（宮城県教育委員会1980c）や加美町

東山遺跡 SI133 住居跡出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所 1989）他にも類例を求めることができる。これらの土器群は年代的には 7 世紀末～8 世紀前半に位置づけられており（佐藤 2007 他）、源光遺跡 SI1 竪穴建物跡出土土器もこれらと同様、概ね 8 世紀前半頃と捉えられる。

② 遺構の特徴

SI1 竪穴建物跡は一度拡張して建て替えられている（SI1A → SI1B）。A は平面形が一辺約 3.3m の隅丸方形、B は A の東・南・西側を拡張した、東西約 5.5m、南北約 4.8m の隅丸方形を呈する。床面は、A では掘方埋土の上面であり、B では A の床面をそのまま利用するとともに拡張部も掘方埋土とし、一部に貼床がなされていた。主柱穴は A では検出されていないが、B は 4 本の主柱がある建物であったと推定される。カマドは A では北壁中央に付設されており、B ではその東隣に設置されている。B カマドは本体が白色土および地山小ブロックを含んだ褐色土で構築され、両端部に土師器甕が埋め込まれている。その残存状況からみると、カマド本体は最終的には破壊されたものと考えられる。

SI1B では炭化材が床面やその上層から多量に出土しており、壁際から竪穴建物の中心に向かって倒れ込んだ材は垂木、それに直交した材は桟木とみられる。それらの出土から、この建物が最終的に焼失したことは明らかである。

この SI1B は焼失建物としては床面からの出土遺物が少ない。また、カマド内では土師器甕（第 13 図 5）が伏せられた状態で出土し（註 1）、先述のようにカマド本体は人為的に破壊されたとみられる。これらのことから、SI1B 竪穴建物は主な道具を持ち出し、カマドを破壊したうえで意図的に焼失させたことが考えられる。

（2）集落の様相

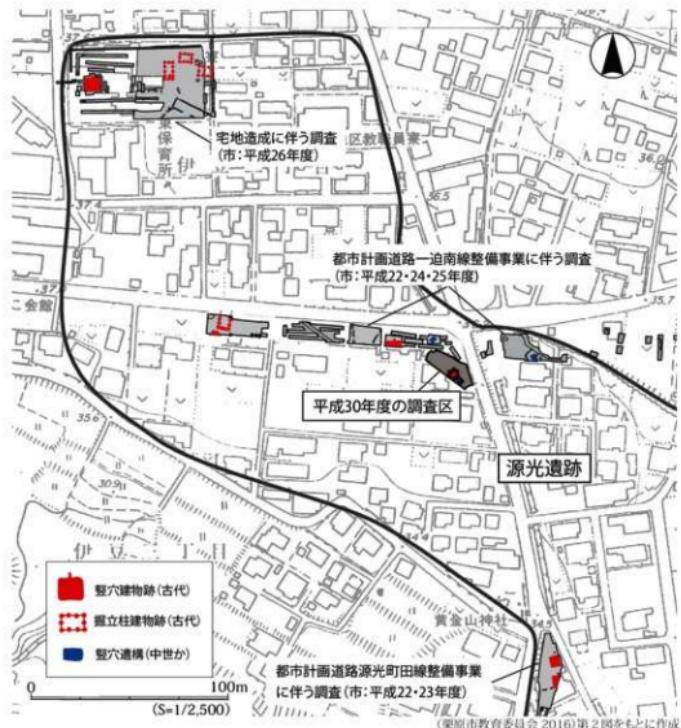
源光遺跡では、今回の調査地点以外でも道路整備事業や宅地造成等に伴う発掘調査によって古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが確認されている（第 17 図）。これらの年代は概ね 8 世紀前半から 9 世紀前半頃に位置づけられており、在地型の竪穴建物跡が検出された今回の地点と異なり、遺跡北西部では関東系土師器を主体とする 8 世紀前半頃の集落の広がりも認められる（栗原市教育委員会 2015）。また、当遺跡と隣接する原田遺跡（第 2 図）では 8 世紀前半から 9 世紀前半、下萩沢遺跡南半部では 8 世紀後半を中心とした時期に竪穴建物（住居）と掘立柱建物で構成された、官衙と密接に関連するとみられる集落の存在が明らかになっている（宮城県教育委員会 2009）。

第 2 章でも触れたように、古代における当地域の集落形成の過程には、伊治城造営や古代栗原郡設置が深く関わっているとみられることから、当遺跡の集落形成や展開についても、こうした歴史的背景を踏まえて検討していく必要がある。

2. その他の時代について

（1）縄文時代

SK3 土坑、および P4 ピットは遺物が出土していないが、両者とともに堆積土が II 層（旧表土）に類似した黒褐色シルトで、古代以降の遺構堆積土とは明確に異なること、周辺で縄文土器が出土してい



第 17 図 源光遺跡調査地点と遺構分布

ることなどを考慮すると、これらの遺構は縄文時代に属する可能性がある。また、縄文土器は調査区南壁II層やSI1A 竪穴建物跡の掘方埋土、SI1B 竪穴建物跡堆積土など、SK3 や P4 がある調査区南東付近のみで出土しており、この周辺には縄文期の未確認の遺構が存在する可能性が高い。

(2) 中世

SX2 竪穴遺構は遺物が出土していない。ただ、近隣の木戸遺跡（宮城県教育委員会 1980a）や原田遺跡（宮城県教育委員会 2009）、同じく栗原市の観音沢遺跡（宮城県教育委員会 1980c）で形状や規模が類似した竪穴遺構が確認されており、木戸遺跡では中世陶器が、観音沢遺跡では中世陶器と北宋錢が出土している。また、こうした形状の竪穴遺構は他地域でも確認されており（栃木県教育委員会 1995、常陸大宮市教育委員会 2016 他）、いずれも中世の遺構と考えられている。これらとの類似や 10 世紀前葉頃には埋没しつつあった SI1B 竪穴建物跡より新しいことを踏まえると、SX2 竪穴遺構も中世期に属する可能性が高いと考えられる。

3.まとめ

- 源光遺跡は栗原市築館伊豆、築館源光ほかに所在し、築館丘陵から派生するなだらかな丘陵上に立地する。
- 調査の結果、奈良時代（8世紀前半頃）の竪穴建物跡1軒、中世の可能性のある竪穴遺構1基、縄文時代の可能性のある土坑1基、ビット1個を検出した。
- SI1竪穴建物跡は一度建替えられ（SI1A→SI1B）、最終的には焼失している。出土遺物には、土師器環・甕・ミニチュア土器、須恵器环があり、床面出土のものは少ない。カマド内には土師器甕が倒置され、カマドも壊された状況を示す。これらのことから、建物を放棄する際に主な道具を持ち出し、さらにカマドを破壊したうえで、建物を意図的に焼失させたものと考えられる。

註1 カマドに甕を倒立させる事例も含め、福島県内ではカマド天井部崩落土の上に遺物を置く事例が多いことが指摘されている（丹治2009）。源光遺跡の場合は、土師器甕の破片をカマド崩落土が覆っていることから、天井部の崩落前にカマド内に甕が倒置されたと考えられる。

引用・参考文献

- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”的同定」『第四期研究』29巻2号 pp.121-130
- 小山正忠・竹原秀雄 1996 「新版 標準土色帳」日本色研事業株式会社
- 栗原市教育委員会 2012 「源光遺跡」栗原市文化財調査報告書第15集
- 栗原市教育委員会 2015 「平成26年度 史跡伊治城・源光遺跡発掘調査の概要」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.117-124 古代城柵官衙遺跡検討会
- 栗原市教育委員会 2016 「下秋沢遺跡」栗原市文化財調査報告書第20集
- 佐藤敏幸 2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15年度～平成18年度 科学研究費補助金（基盤B）研究成果報告書 pp.164-209
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』pp.1-38 宮城県多賀城跡調査研究所
- 丹治篤嘉 2009 「カマド燃焼部における遺物出土状況の検討」『福島県文化財センター白河館研究紀要2009』pp.1-32 福島県 文化振興事業団
- 築館町教育委員会 1993 「伊治城跡」築館町文化財調査報告書第6集
- 柄木県教育委員会 1995 「下古館遺跡」柄木縣埋蔵文化財報告第166集
- 常陸大宮市教育委員会 2016 「北原遺跡Ⅱ」茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 宮城県教育委員会 1980a 「木戸遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 1980b 「山ノ上遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 1980c 「觀音沢遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1982 「御駒堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」宮城県文化財調査報告書第83集
- 宮城県教育委員会 2009 「原田・下秋沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第219集
- 宮城県教育委員会 2016a 「大天馬遺跡・後沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第241集
- 宮城県教育委員会 2016b 「御駒堂遺跡・堂の沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第244集
- 宮崎町教育委員会 1999 「境の越遺跡Ⅲ」宮崎町文化財調査報告書第11集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1989 「東山遺跡Ⅲ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第14冊
- 村田晃一 2004 「三重構造城柵論」『宮城考古学』第6号 pp.159-187 宮城県考古学会

写真図版



1. 調査区北西半（南東から）



2. 調査区南東半（西から）

写真図版 1 調査区



1. SI11・SX2 検出状況（南東から）



2. SI1B 炭化材・焼土ブロック検出状況（南東から）

写真図版 2 SI1B 竪穴建物跡、SX2 竪穴遺構



1. SI1B 床面検出状況（南から）



2. SI1A カマド煙道部断面（東から）



3. SI1A-K1（北から）



4. SI1B カマド付近炭化材・焼土ブロック堆積状況（南西から）



5. SI1B 土師器片（第12図1）・甕（第12図3）出土状況（南から）

写真図版3 SI1A・B 穴建物跡



1. SI1B カマド煙道部断面（東から）



2. SI1B カマド機能面と出土状況（南から）



3. SI1B カマド出土状況（南から）



4. SI1A・B カマド完掘状況（南から）



5. SI1B-P1（西から）



6. SI1B-P2（東から）



7. SI1B-P3（北から）



8. SI1B-P4(右)・P5(左)（南から）



9. SI1B-P6（東から）

写真図版4 SI1B 積穴建物跡



1. SX2 断面（北東から）



2. SX2 完掘状況（北東から）

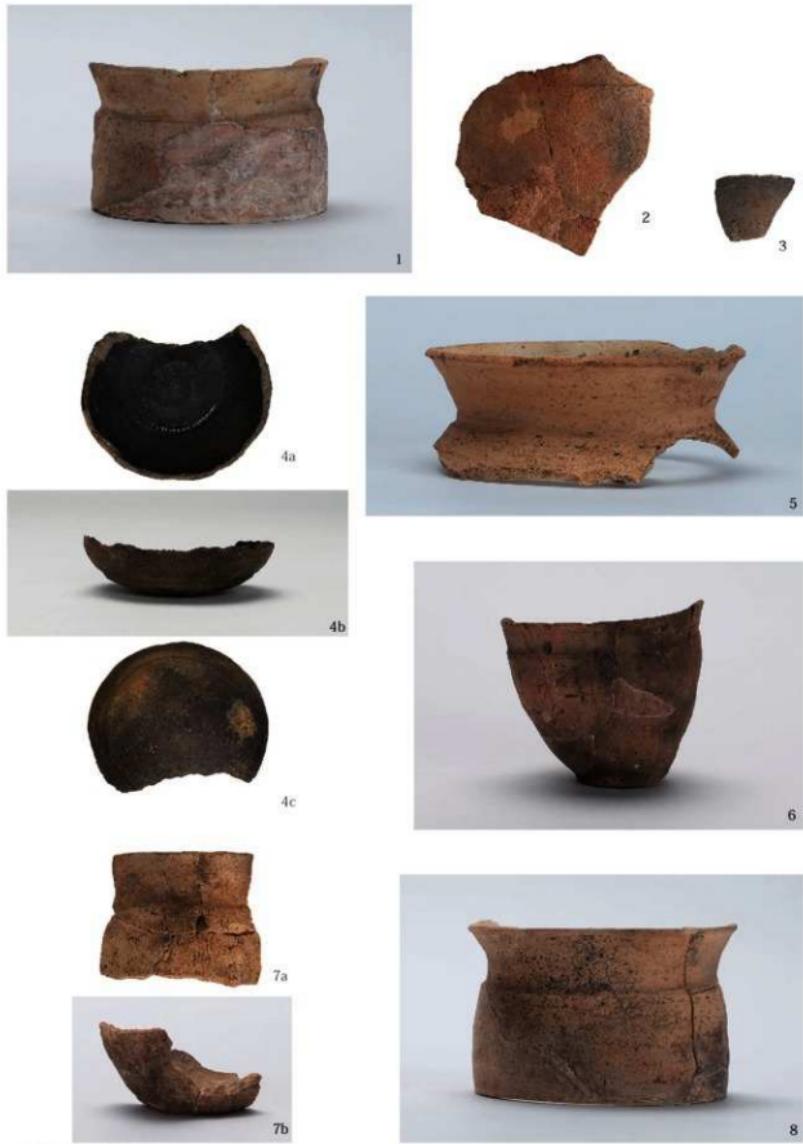


3. SK3 断面（南東から）



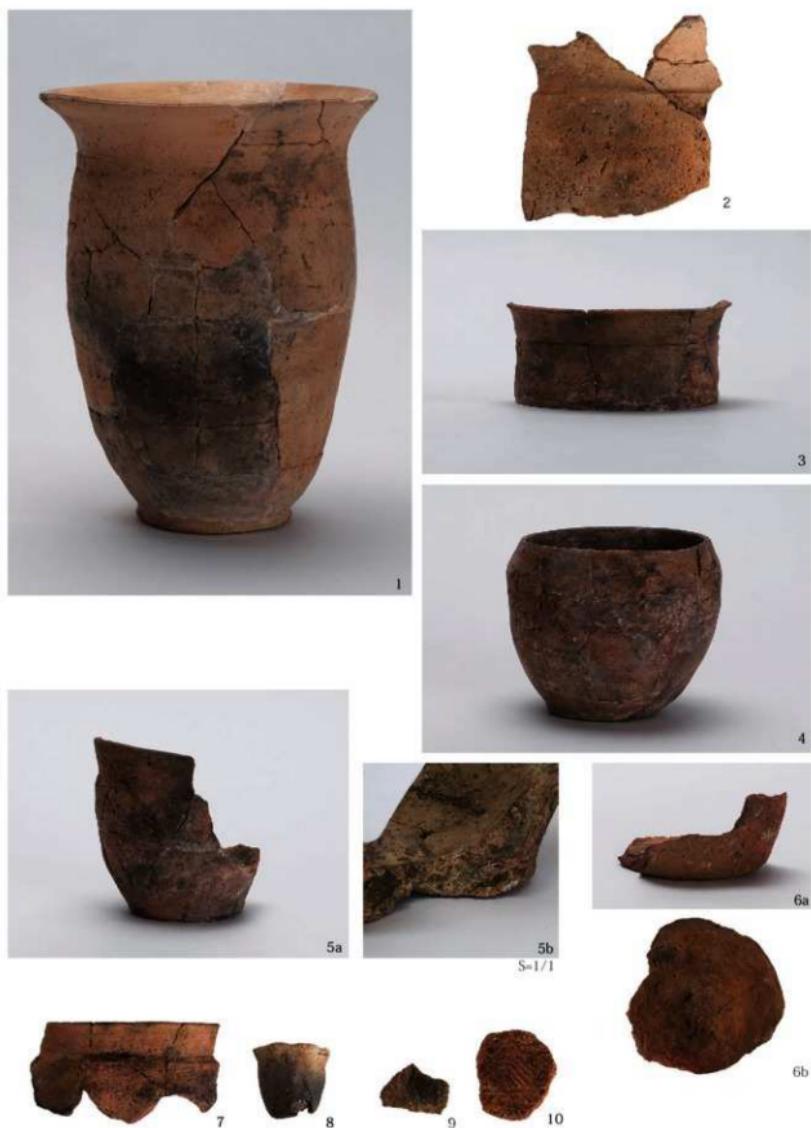
4. P4 断面（北から）

写真図版5 SX2 竪穴遺構、SK3 土坑、P4 ピット



1・2:SI1A, 3・8:SI1B
S=1/3

写真図版 6 SI1A・B 竪穴建物跡出土遺物



1-8,10:SI1B, 9:調査区南壁Ⅱ層
S=1/3

写真図版 7 SI1B 竪穴建物跡・遺構外出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	げんこういせき							
書名	源光遺跡							
副書名	都市計画道路源光町田線関連遺跡調査報告書							
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第249集							
編著者名	矢内雅之							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町 3-8-1 TEL: 022-211-3685 FAX: 022-211-3693							
発行年月日	西暦 2019年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号	北緯	東経		
源光遺跡	栗原市栗原館伊豆、 栗原市栗原館伊豆、 栗原市栗原館内沢	042137	41068	38度 43分 51秒	141度 1分 47秒	確認調査 2017.10.11 本発掘調査 2018.06.04 ～ 2018.07.13	確認調査 51m ² 本発掘調査 310m ²	道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
源光遺跡	集落跡	縄文 古代 中世	縫穴建物跡 1	縫穴遺構 1	縄文土器 土師器 須恵器	縫穴建物跡（8世紀前半） は建て替え後、焼失。 縫穴遺構は中世か。		
要約	源光遺跡は、栗原市栗原館伊豆・栗原館源光ほかに所在し、栗原丘陵から派生するなだらかな丘陵上に立地する。調査の結果、奈良時代の縫穴建物跡（8世紀前半）1軒のほか、縄文時代の可能性のある土坑1基・ピット1個、中世に属するとみられる縫穴遺構1基などを検出した。 奈良時代の縫穴建物跡は一度建て替えがなされ、最終的には焼失している。カマドは意図的に破壊されているとみられる。出土遺物には土師器壺、甕・ミニチュア土器、須恵器壺などがあるが、床面出土のものは少ない。こうした状況から、この縫穴建物を放棄する際に意図的に焼失させた可能性が考えられる。							

宮城県文化財調査報告書第249集

源光遺跡
—都市計画道路源光町田線関連遺跡調査報告書—

平成31年3月15日印刷

平成31年3月20日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022(231)2245㈹
